

# 現代日本語の「形容詞化辞」について

近藤 研 至

## 0 はじめに

現代日本語の形容詞の新造語は、複合語と派生語による合成語として形成されていることがほとんどである。複合形容詞としては、「息苦しい・手痛い・毛深い」などの「名詞+形容詞」によって形成されるタイプ、「粘り強い・親しみやすい・待ち遠しい」などの「動詞連用形+形容詞」によって形成されるタイプ、「けち臭い・邪魔くさい」など「ナ形容詞+イ形容詞」によって形成されるタイプ、「青白い・薄暗い・うれし恥ずかしい」などの「イ形容詞+イ形容詞」によって形成されるタイプなどがある。また派生語としては、たとえば「小高い・か細い・だだっ広い・こっ恥ずかしい」などの「接頭辞+形容詞」によって形成されるタイプと、「くどくどしい・あつぼったい・汚らしい・水っぽい」などの「形容詞語幹・名詞+接尾辞」によって形成されるタイプがある。

小論はこうした合成形容詞の中の、派生形容詞、中でも、一般に接尾辞によって形成されているとみられる形容詞を取り上げる。宮島(1980)は、

語構成とは、「単語のつくりかた」のことであるが、「つくりかた」ということばの多義性が示すように、これには二つの側面がある。一つは、新しい単語はどのようにしてつくられるかという成立事情つまり造語的な側面で、もう一つは、ある単語がどのような構造をもっているかという語構造上の側面である。

と述べている。小論では、このうち前者の態度から派生形容詞を生産する接尾辞について、その接尾辞を記述し、その接尾辞の中に、形容詞を積極的に生産するものと、形容詞ではなく形容詞性述語を生産するものがあることを指摘する。

## 1 派生形容詞を形成する接尾辞

本節では、『現代形容詞用法辞典』中の見出し語の中から、接尾辞の付加によって形成されている語を取り上げ、その接尾辞ごとに整理した。なお、『現代形容詞用法辞典』では多くの用例が取り上げられ

ているが、その中で、形態的に複合形容詞か派生形容詞なのか微妙な類がある。「-がたい」「-かねない」「-かもしれない」「-きれない」「-くさい」「-ざるをえない」「-そこしれない」「-つらい」「-ない」「-にくい」「-ふかい」「-やすい」を語尾として見出し語にしているが、これらは明らかな語尾の「-しい」や「-たい」などとは違っている<sup>(1)</sup>。確かに、「-がたい」など、「ありがたい」「おかしがたい」「言い出しがたい」のように使用される上、「難しい」自体も単語としての使用はほとんどなく、ここで述べたような「形容詞の一部」として現れることがほとんどである。そのために、「語の一部要素」とみなすことはできるが、それは（「-しい」や「-たい」に比べると）語彙的意味を完全になくしているとは言い難いことは確かである<sup>(2)</sup>。小論では、こうした語彙的意味を残していると思われる形態は取り上げなかった。

以下、『現代形容詞用法辞典』に採録されている全語中、形態的に接尾辞を含む派生形容詞を抽出し、それを形成している接尾辞ごとに整理をした。

①ポイ

青っぽい・赤っぽい・飽きっぽい・あだっぽい・荒っぽい・衰れっぽい・いがらっぽい・怒りっぽい・色っぽい・男っぽい・大人っぽい・女っぽい・キザっぽい・愚痴っぽい・黒っぽい・子供っぽい・ざらっぽい・しけっぽい・湿っぽい・白っぽい・俗っぽい・つやっぽい・苦っぽい・熱っぽい・皮肉っぽい・埃っぽい・骨っぽい・惚れっぽい・水っぽい・むせっぽい・安っぽい・忘れっぽい

②パイ

しょっぱい・酸っぱい

③シイ

荒々しい・いけずうずうしい・痛々しい・忌々しい・うやうやしい・雄々しい・おどろおどろしい・重々しい・軽々しい・角々しい

---

(1) 『現代形容詞用法辞典』では「-しい」や「-たい」などは見出し語として取り上げていない。取り上げられているのは、「-らしい」「-たらしい」「-ぼい」「-かましい」「-めかしい」である。

(2) 「息苦しい」や「気味悪い」「意地汚い」などになれば複合形容詞であると分類できそうであるが、「-がたい」などはそこまでの語彙的意味が残っているかという疑問である。

い・甲斐甲斐しい・仰々しい・くだくだしい・くどくどしい・け  
ばけばしい・神々しい・事々しい・白々しい・清々しい・騒々し  
い・空々しい・猛々しい・たどたどしい・毒々しい・とげとげし  
い・長々しい・生々しい・なれなれしい・苦々しい・にぎにぎし  
い・憎々しい・はかばかしい・ばかばかしい・派手派手しい・華々  
しい・福々しい・ふてぶてしい・古々しい・まがまがしい・まめ  
まめしい・瑞々しい・女々しい・物々しい・由々しい・弱々しい・  
よそよそしい・麗々しい・若々しい・鬱陶しい・大人しい・けた  
たましい・騒がしい

④ラシイ

愛らしい・あほらしい・男らしい・女らしい・かわいらしい・汚  
らしい・しおらしい・しかつめらしい・子細らしい・憎らしい・  
ばからしい・誇らしい・もったいらしい・もっともらしい・わざ  
とらしい

⑤タラシイ

嫌味ったらしい・キザったらしい・こにくたらしい・自慢ったら  
しい・スケベったらしい・貧乏ったらしい・不精ったらしい・長  
たらしい・憎たらしい・みじめったらしい・むごたらしい

⑥ワシイ

いかがわしい・いたわしい・いとわしい・疑わしい・憂わしい・  
おもわしい・気遣わしい・慕わしい・嘆かわしい・似合わしい・  
賑わしい・似つかわしい・願わしい・呪わしい・ふさわしい・勿  
体らしい・わずらわしい

⑦マシイ<sup>(3)</sup>

浅ましい・痛ましい・疎ましい・うらやましい・妬ましい・望ま  
しい

⑧カマシイ

厚かましい・恨みがましい・おこがましい・押しつけがましい・  
恩着せがましい・差し出がましい・晴れがましい

⑨カシイ

危なっかしい・そそっかしい・いぶかしい

⑩メカシイ

---

(3) 「つつましい」「おぞましい」「やかましい」「たくましい」など、X+マシイなのか、それ全体で初めから語彙化されているのかわかりづらい例もある。小論では、これらは派生形容詞とはしなかった。

- 色めかしい・なまめかしい・古めかしい
- ⑪コシイ  
ややこしい・まだるっこしい・まどろっこしい
- ⑫バシイ  
喜ばしい
- ⑬チイ  
みみっちい・まるまっちい
- ⑭タイ<sup>(4)</sup>  
重たい・煙たい・野暮ったい・眠たい・くすぐったい・じれったい・冷たい
- ⑮バツタイ  
口はばったい
- ⑯ベツタイ  
薄べったい・平べったい
- ⑰ボツタイ  
腫れぼったい・厚ぼったい
- ⑱メタイ  
後ろめたい
- ⑲コイ  
油っこい・すべっこい・のめっこい・せまっこい・ねちっこい・粘っこい・冷やっこい・はしっこい・ほそっこい・丸っこい・まだるっこい・ちっこい・人懐っこい
- ⑳シッコイ  
すばしっこい
- ㉑タルイ  
甘ったるい・おかったるい・かったるい・したたるい
- ㉒オシイ  
狂おしい
- ㉓カライ

---

(4) 接尾辞タイは、二つのタイプに分けられる。たとえば、「冷たい」はタを削除できないが、「重たい」はタを削除できる。前者は「冷い」となり不適格であるが、後者は「重い」であり適格である。なお、『現代形容詞用法辞典』には「めでたい」が見出し語として取り上げられているが、これについては「タイ」のグループには入れなかった。花笠音頭の冒頭「めでためでの若松様」にみられるように、「めでた」で切れることから、「めでた+イ」であると小論では扱った。

こすっからい

②④ムサイ<sup>(5)</sup>

じじむさい

②⑤ユイ

面はゆい・こそばゆい

以上のように、現代日本語では、派生形容詞を形成する接尾辞のバリエティはたいそう豊富だと言えるだろう。

接尾辞「シイ」によって形成されている派生形容詞には、二つのタイプがある。一つは「重々しい」「女々しい」に見られるような、語基が「重複語<sup>(6)</sup>」のものである。もう一つは「鬱陶しい」「大人しい」に見られるような、語基が「非重複語」のものであるが、非重複語語基+シイは、一見するところ、例はほとんど見当たらない。ただし、これは注意が必要である。それは「ラシイ」と「タラシイ」は語基が形容詞の語幹であるが、「ワシイ」は形態的には「ワシイ」であるが、語基（の元）がワ行活用動詞で、その未然形に「シイ」が付加していると見えないこともない<sup>(7)</sup>。同じように「マシイ」もマ行活用動詞の未然形に「シイ」が付加していると見えないこともない。「メカシイ」も、たとえば「古めく」の未然形に「シイ」が付加していると言え、これも「シイ」と言えるだろう<sup>(8)</sup>。また、「カマシイ」も連濁が起きている個所から見れば、やはりそれに前接するところは動詞の連用形である。「コシイ」、「バシイ」も同様である。こうして考えると、「ラシイ」、「タラシイ」を除く非重複語語基に後続する、形態的に

- 
- (5) これは「クサイ」とほぼ同じであると考えられる。ただし、動詞起源の語基であるという指摘にとどめておく。
- (6) 小論では小野(2015)にならい、reduplicationに対応する語として「重複語」を用いる。近似的な語としてはrepetitionに対応する語として「反復」があるが、こちらは「どんまい、どんまい」や「いいって、いいって」などのような「表現の反復」と対応する。
- (7) もちろん、語基が「未然形」とするのはやはり問題であり、このあたりの解釈は別稿に譲る。
- (8) こうしたメク系の動詞はいろいろとある。「はためく」「きらめく」などである。しかし、このうち、「Xメカシイ」となる語は、限られる。その制限理由を、Xが形容詞であるとすると、「きらめく」は形容動詞語基とも解釈できることから、一概には言えないことになる。

「シイ」を含む接尾辞は、すべて「シイ」でまとめられるかもしれない<sup>(9)</sup>。ただし、そうであっても上で述べたように、派生形容詞を形成する接尾辞は豊富であることには変わりがない。

## 2 形容詞化辞

### 2-1 形容詞の生産と形容詞化辞

派生形容詞形成の側面から見ると、それに貢献する接尾辞には二種類ある。『現代形容詞用法辞典』に取り上げられている語については、その語幹として、「名詞、動詞の連用形」の場合と、「形容詞と形容動詞の語幹」の場合とがあり、それらに接尾辞が「つく」と説明されている<sup>(10)</sup>。前者については名詞、動詞の連用形以外の語幹も存在することから、形容詞以外を語基として形容詞を生産する接尾辞と言え、後者は既存の形容詞の語基（あるいは語幹）を利用して、新しい形容詞を生産するという接尾辞と言える。前者は「形容詞化辞」と呼んでいいであろう。それに対して後者は、たとえば、「危ない」と「危なっかしい」の違いに見られるような、語基の持つ意味をベースに、なにか固有の性質を付け加えるような役割をしていると言え、小論では形容詞化辞とは呼ばないことにする。

こうした観点に立ったとき、1で記述した接尾辞の中で、形容詞化辞として認定できるのは、どれだろうか。「タラシイ」は形容動詞語幹、「タイ」「ベツタイ」「カライ」「ユイ」は形容詞語幹、「コイ」「ボツタイ」「タルイ」は名詞と形容詞語幹をそれぞれ語基とする。これらと違って、「ポイ」「パイ」「シイ」「ラシイ」「ハバツタイ」「ムサイ」は名詞、あるいは動詞語幹をそれぞれ語基とする。こうしたことから、形容詞化辞と言えるのは、「ポイ」「パイ」「シイ」「ラシイ」「ハバツタイ」「ムサイ」である。また、「コイ」「ボツタイ」「タルイ」は名詞を語基としている場合もあり、形容詞化辞から追い出すことはできないだろう<sup>(11)</sup>。

---

(9) 以下、以上の「接尾辞」は「シイ」として扱うことにする。

(10) たとえば、「-たらしい」の説明を見よう。

名詞や形容詞・形容動詞の語幹について、いかにも～のように感じられて不快だ  
という意味を表す。マイナスイメージの語。(p347) (下線筆者)

と説明されている。

(11) 今、「語幹」の形態に着目したが、語幹もまた構成的な観点からの呼び名である。  
これについては、後の節で「語基化」という動的な観点から再度述べ直す。

ところで、次の例などはどのように考えたらいいのだろうか。「エロい」「チャライ」「きもい」などである。一見すると、これは語彙登録された典型的な形容詞であるように見えるが、しかし、この場合の「イ」は多くの形容詞の語尾とは違い、(接尾辞としていいかどうかは再考が必要であるが)形容詞化辞と言ってもいいだろう<sup>(12)</sup>。

## 2-2 語彙化

今、形容詞化辞について、その語幹の形態に着目して述べたのであるが、ここで生産性について述べよう。田村(2005)は

このうち「ばい」や「らしい」など一部の接辞を除いて、造語能力は低く、結び付く語基が限られていたり、語彙的に固定されたものが多く見られる。

と指摘している。形容詞化辞という性質からすれば、当然、その接尾辞は高い生産性を有することを期待される。2-1で「イ」「ポイ」「パイ」「シイ」「ラシイ」「ハバツタイ」「ムサイ」を形容詞化辞とした<sup>(13)</sup>のであるが、たとえば、「パイ」と「ハバツタイ」と「ムサイ」はそもそもその用例の少なさからして、形容詞化辞というには生産性が低すぎる。さらに形容詞化辞の認定を保留した「ボツタイ」「タルイ」はその用例は少なく、やはり形容詞化辞というには生産性が低すぎる。確かにある時期にこれらは形容詞化辞として機能をしたであろうが、現在では(語彙化しており)そうした機能は失していると言えよう。なお、「コイ」は「懐っこい」「厚っこい」だけではなく、「ずっこい」などがあり、形容詞化辞と言えるだろう。具体的な用例は後に譲るが、1で記述した例の中で、「イ」と「シイ」と「ポイ」と「コイ」と「ラシイ」は(田村も指摘している通り)語彙化されているものも多いが、(田村の指摘とは異なって多くの用例が採録でき)生産性は高く、形容詞化辞として機能していると言える。

## 2-3 形態的特徴

ところで、小論では形容詞の生産の問題を取り上げて論じているが、

---

(12) こうした形容詞化されたと思うもので、『現代形容詞用法辞典』に見出し語として取り上げられていた語は「白い(はくい)」のみであった。

(13) 「ぎざかわゆす!」という表現が数年前に流行った。この場合の「ス」ははたして形容詞化辞であろうか。こうした流行語レベルでの形容詞化辞があるかもしれない、今後の課題としたい。

生産された形容詞はそのでき方を問わず、次の特徴は共通している。

一つ目は語中のアクセントの特徴である。形容詞は、いずれも最終音節「イ」の直前にアクセントの滝がある。1で記述したように、形容詞の語尾にはいくつかのバラエティがあるが、どのような語尾であっても、現代日本語の形容詞の最終音節は「イ」であり、この「イ」の直前にアクセントの滝がある。形容詞化辞によって生産される形容詞についてもこの特徴は厳守されている。これについては次節で述べる。

もう一つの特徴は、「サ」による名詞化に見られる特徴である。たとえば、「痛い」については「痛さ」、「悲しい」については「悲しさ」のように、それぞれの語基に「サ」が付加することで名詞として機能する。このことと派生形容詞との対応を見てみると、元来、派生語であったのに、名詞化の形成においてはそれがきしんでいる様子が見られる。たとえば、重複語語基をもつ形容詞「重々しい」の場合、「重々+シイ」で、「重々」までが語基である。ところが、名詞化するときには、「重々しさ」のように、「重々し」+サという方向で形成される。この観察は、実は、1で記述したすべての語彙にあてはまる。さまざまな形成のされ方を経過していたとしても、この名詞化における特徴は共通していると言える。

もう一つは形態変化に見られる特徴である。形容詞は、語幹から語尾にかけて長音化する現象が多くみられる。「長い」が「長げー」、「危ない」が「危ねー」に、さらに「暑い」が「暑ちー」になる。こうした中で語幹がエ列音であったりイ列音であったりするのは、語幹、語尾の境がなくなり、これは「危ね+え」でも「暑ち+い」でもないと解釈できる。形容詞は語彙化が進むとこうした現象を許容する。新しく生産された形容詞も、たとえば「チャライ」、「四角い」などにおいて、「チャレー」、「しかけー」を許容する<sup>(14)</sup>。

### 3 形容詞化辞と述語化辞

西尾(1972)は、「形容詞の異なり語数の数は動詞のそれに比べてずっと少ない」とし、「日本語の形容詞は歴史的に途中で発達がとまってしまった観があり、これをカバーするものとしていわゆる形容動詞

---

(14)「エロい」は「エレー」を許容しない。これは語彙化というよりも同音衝突の問題が関係していると言えるだろう。



が発達してきている」と指摘している<sup>(15)</sup>。

ただしこの西尾の主張は、あくまで形容詞の「発達」がとまったあと、形容動詞が「カヴァーしている」とするだけで、「形容動詞という語が形容詞にとってかわった」とは言っていない。形容動詞は「語」であるのか。

形容詞と形容動詞の違いについて、語彙的緊密性lexical integrityの側面から考えてみよう。「語」における語幹と語尾は分析的に抽出される部分である。形容詞においては、その語が語彙化されている限り、その語幹と語尾とは高い語彙的緊密性を有する。たとえば「暑い」「寂しい」において「暑」「寂し」は語幹であり、「イ」は語尾であり、そして語幹と語尾との緊密性は高い。それに対して「元気だ」「ドロドロだ」などの形容動詞は「元気」「ドロドロ」が語幹と見られ、「ダ」が語尾だと見られるが、この語幹と語尾との緊密度はどうであろうか。

まずアクセントの側面から見てみよう。前節で述べた、形容詞に共通する形態的特徴としてのアクセントの滝の問題は、新造語においても共通している。たとえば「エロい」において「イ」の直前音節にアクセントの滝がある。しかし、「エロ」はそのままの形でのアクセントでは「エ」にアクセント核がある。しかし「エロい」となると「ロ」の音節は高いアクセントになる。しかし、これは「イ」の直前音節にアクセントの滝を持つ形容詞としての音調的特徴を備えさせるための加工であると言えるだろう。それに対して形容動詞は、「元気だ」「ドロドロだ」などに見られるように、それぞれの語における最終音節「ダ」のアクセントはそれぞれである。形容動詞の場合、語幹のアクセントはそのまま保たれるのである。こうした語幹のアクセントの保存の事実は語幹と語尾との緊密性の薄さを示すことになるだろう。

次に「語基化」という側面から見てみよう。派生形容詞の「エロい」「重々しい」などは、「エロティック」「重い」をそれぞれ基体として派生形容詞を生産するために、「エロ」のように省略をしたり、「重々」のように重複語化したりなど、それぞれの基体を語基となるように加工する。こうしたことを「語基化」と呼ぼう。形容詞はこうした語基

---

(15) ただし、こうした指摘は間違いではないが、「歴史的に途中で発達がとまってしまった」のは、別に形容詞に限られるわけではない。形容詞に限らず「全く新しい語」が生産されるということは困難で、別の見方をすれば、形容詞は形容動詞という新造語のシステムが形成されたがゆえに、(それをもし語彙化と呼ぶならば) 語彙形成は形容動詞に譲っただけの話であろう。

化のプロセスを経、「語」が生産される。それに対して形容動詞は、たとえば「元気だ」は形容動詞であると扱われるが、それはそもそも「元気」に「ダ」が付加して形成されたことは明らかであるが、それが全体として語彙化されていると言えるだろうか。実際、品詞レベルの話であると、「たっぷんたっぷんだ」「ぼろぼろぼっちゃんだ」などという形態も、「たっぷんたっぷんなお腹」「ぼろぼろぼっちゃんな人」となり、ナ形容詞として扱われるだろう。しかし、この形態は語彙化されない。語彙化されないにもかかわらず、形容動詞として認定されるというのは少し変な話である。ただ、形容動詞であるかどうかの差は、語基が状態名詞かどうかの違いに由来するだろう。しかしそれだけの差であり、その差が「語」か「語」じゃないかの認定に係るとするのは、「語」というのが形態論的範疇である限り、これもまた変な話である。

こうした語彙的緊密性の側面から形容詞と形容動詞を観察したとき、派生形容詞における語基と接尾辞の緊密性が高く、それぞれ語幹、語尾として取り扱っていいと言えるが、形容動詞は語基と「ダ」の緊密性は高くなく、語幹、語尾という取り扱いには疑問が残る。こうした点から形容動詞という「語」があり、「ダ」はその語尾であるという扱いではなく、「ダ」は述語化辞としてかなり自由に述語として機能させる句に付加すると言えるだろう。それはたまたま「元気だ」「親切だ」という一見語幹に見える基体に付加しているように見える例も多くあるが、「パンダの子どもだ」「寝ているアキラだ」のように、「ダ」の前には句も現れる。こうして小論では（装定用法、述定用法をもつが）「ダ」は述語化辞であると考え、形容動詞を「語」とは考えない。

今、形容詞と形容動詞の語彙的緊密性から、形容詞は「語」であるが形容動詞は「語」ではなく述語であるということを描いた。この観点からすれば西尾の指摘は少し修正が必要になる。それは形容詞から形容動詞に語彙形成のシステムが移行したのではなく、「ダ」という述語化の自由度によって語彙に限定する必要から解放されたと言べきだろう。

#### 4 「イ」と「シイ」と「ラシイ」と「ポイ」

3で形容詞と形容動詞を形態的に比較し、形容詞化辞と述語化辞があるという立場から、今まで形容詞化辞と一括してきた形態についてみてみよう。

#### 4-1 「ポイ」と「ラシイ」

「ポイ」について『現代形容詞用法辞典』では次のように説明されている。

(ア) 名詞、形容詞の語幹などについて、～のように見えるという意味を表す。ややマイナスイメージの語。前にくる語の程度を弱める働きをする。

(イ) 動詞の連用形について、～しがちであるという意味を表す。ややマイナスイメージの語。あまり好ましくない傾向について用いることが多い。(pp.497-498)

(ア) の例としては「水っぼい」「嘘っぼい」などで、(イ) は「怒りっぼい」「惚れっぼい」などである。ただし、(ア) は語彙化されているものばかりではなく、「塩昆布っぼい」「アキラっぼい」「ヲタっぼい」「ラクロスっぼい」など、かなり生産性が高い。ただし、(イ) については次の小原(2010)の指摘を検討してから触れることにする。

小原(2010)は「ポイ」が付加するのは語基と言うより名詞句であると指摘する。

(1) あの子の顔、タヌキの顔っぼい。

において、「ポイ」の作用域は「顔」だけではなく「タヌキの顔」である。また、小原(2010)は扱っていないが、

(2) あいつ、野田に住んでいる医者っぼい。

(3) あいつ、野田に住んでいる医者の息子っぼい。

において、「ポイ」の作用域は、(2)では「野田に住んでいる医者」(連体修飾節も含む)で、(3)では「野田に住んでいる医者の子供」とかなり長い名詞修飾節をも作用域に収めることができる。

「ポイ」の作用域が直接付加する名詞なのかそれとも名詞句なのかというのは、語用論的な解釈に依存するものなのであろうか。語彙化されている例を取り上げて考えてみても、

(4) あいつ、いいとこの子どもっぼい。

(5) これ、元荒川の水っぼい。

にしても、「ポイ」の作用域は「子どもっぼい」や「水っぼい」という、名詞句を形成している一部のみではなく、「いいとこの子ども」「元荒川の水」が作用域となる。そう考えると、「ポイ」は、語基+ポイと句+ポイとがあるのではなく、そもそも句+ポイという形成と言えるのではないだろうか。このことから、先の(イ)の例について見てみよう。

- (6) a 走りっぽい  
 b 彼の走りっぽい
- (7) a すすめっぽい  
 b 学問のすすめっぽい

それぞれのaで見られるように、動詞の連用形は、動詞それだけでは表現しにくく、bのように句の形態をとることによって生産性が保たれている。

「ポイ」のそうした機能を前提とするとき、「最近の用法」として、多く見られる次のような例についての説明もつくことになる。

- (8) ヤスが帰ってきたっぽい。
- (9) あそこに犬が隠れているっぽいよ。
- (10) あの子、前に別の男とつきあってたっぽい。

このような例については、「ポイ」をモーダルな形式として解釈する立場もあるが、それを認めた上で、接続の側面から、小論ではこうした例は命題接続とする<sup>(16)</sup>。小原(2010)は、このような例と先にあげた句接続の例双方を一括して「新規用法」と呼んでいる。それについては小論も認めることはやぶさかではないが、この二つが「別々の用法」として一括されるのではなく、小論では、「ポイ」がそもそも句接続という機能を有しているがゆえに、その延長上、生じた用法であると解釈する。

次に「ラシイ」について見てみよう。「ラシイ」は、『現代形容詞用法辞典』では次のように説明されている。

- ・他の語について確実性の高い推量を表すプラスマイナスのイメージはない。助動詞として扱われることが多いが、接尾語扱いすることもあり、両者の違いは必ずしも厳密にはつかない。
- ・典型的である様子を表す。ややプラスよりのイメージの語。おもに名詞につく接尾語として扱われることが多い。(p591)

「ラシイ」も1で見たように語彙化されているものもあるが、「コーヒーらしい」「オレンジらしい」「アキラらしい」など、生産性は高い。そして「ポイ」同様「ラシイ」もまた以下の例に見られるように句接続と言える。

---

(16) 岩崎(2009)はこうした例について「句接続」として扱っている。しかし、小論では(小原(2010)の扱う)名詞句接続を「句接続」と扱うと、岩崎が名づける「句接続」とは範囲が異なると考え、(8)~(10)のような例を「命題接続」、それ以外を「句接続」として扱うことにする。

(11) このタヌキはタヌキの子どもらしいタヌキの子どもだ。

(12) あいつは生粋の野田育ちらしい男だ。

しかし、「ラシイ」は「ポイ」と比べてみると、形容詞化辞というよりもモーダルとして機能する方が強く現われる。

(13) この動物はタヌキの子ども {ラシイ／ポイ}。

(14) あいつは生粋の野田育ち {ラシイ／ポイ}。

(13)、(14)をみると、「ポイ」は形容詞化辞として機能しているが、「ラシイ」の場合はモーダルとしての機能が前面に出る。「ラシイ」が形容詞化辞として機能するのは「このXはXらしい」「これはXらしいX」というような文型においてであり、それ以外はモーダルの意味解釈を受けることが多い。

このように見ると、小論では「ポイ」と「ラシイ」を形容詞化辞としてきたが、句を基体として付加をする両形態は、(形容詞化辞ではなく)形容詞性述語化辞であると言えよう。

#### 4-2 「イ<sup>(17)</sup>」と「シイ」と「コイ」

西尾の指摘に関わらず「イ」の生産性は低くはない<sup>(18)</sup>。例えば「せこい」「むずい」「ナウい」「いもい」「けばい」「はずい」「うざい」「チャライ」「きしよい」「きもい」「おたい(オタクっぽい)」「びみょい(微妙な)」「めんどい(面倒くさい)」「うっとい(鬱陶しい)」「エロい」「グロい」「ごつい」「くどい」「ちょろい」「ピンクい」など多く生産されている。

一見すると、現代語では、「エロい」、「チャライ」など、外来語、オノマトペを基体として語基化が行われるように見えるが、「鬱陶い」「微妙い」などの例もあり、強い制限があるわけではないだろう。基体としては、確かに外来語、オノマトペが多いが、漢語もあるし、句もある(「気持ちい」など)。いずれにせよ、「チャラチャラした」や「エロティック」など、「そのまま」語彙化せず、語基化を施した上で、「イ」を付加する。

次に「シイ」を見てみよう。小野(2015)は「狭々しい」などを引き合いに出し、これを形容詞の語幹とした後、「日本語の重複語のほとんどは語彙化されており、新たな語が次々に作り出されることはない

---

(17) 岐阜方言に「丈夫な」の意味で「丈夫い」がある。ほかにも「横着い」も同様。また

最近「気持ちいい」をブログ等で「気持ちい」とする書記を見かけることも多い。

(18) 以下、用例は、ネット上、あるいはSNS上から採集した。

とってよい」としている。しかし、「イ」同様用例を採集してみると、かなりの語彙にヒットする。「シイ」も「イ」同様いろいろな基体を持つが、語基化において「ガジェガジェしい<sup>(19)</sup>」「もろもろしい」「ごちゃごちゃしい」「メロメロしい」「もえもえしい」「ホモホモしい」「魚魚しい」「ビルビルしい」のような重複語語基化の場合も、「照れくさしい」「へぼすけしい」「のんきくさしい」「ざまみさしい」「はがゆかしい」「墮落しい」「ぼけしい」「ぺけしい」「亀しい」「エロガンダムしい」「仏くしい」のような非重複語語基化の場合もいくらかでも検索でき、自由に生産されていることがわかる。

また「コイ」は「イ」「シイ」ほどではないが、「ちまっこい」「茶っこい」「ひとりっこい」「れあどろっこい」「まめっこい」「ドジっこい」「いもっこい」「柔らっこい」「フェチっこい」「人っこい」「ヒョロっこい」「だるっこい」「ずっこい」など生産性は高いと言えるだろう。

「イ」「シイ」「コイ」は語基化がなされていること、形容詞としての形態的特徴を持つことということにおいて、形容詞化辞として認定できるだろう。

#### 4-3 整理

本節において、指摘したことは、同じような生産性を持ち、一見すると形容詞化辞としてまとめられそうである「イ」「シイ」「コイ」「ポイ」「ラシイ」は、「イ」「シイ」「コイ」が形容詞化辞であり、「ポイ」「ラシイ」は形容詞性述語化辞であると言えるだろう。そして形容詞性述語化辞は、それが句接続である述語化辞であるがゆえに、モーダルな用法を獲得するに至っていると言えるだろう。

### 5 おわりに

小論では、語形成の側面から、派生形容詞を形成する接尾辞を記述した。現代日本語では、こうした接尾辞は生産性が低いと言われていることに対して、「イ」「シイ」「コイ」についてはその限りではないということ指摘した。また、その中でモーダルな用法を持つに至った「ポイ」と「ラシイ」は、ほかの接尾辞付加による形成過程における語基化を有しないこと、さらに句接続であることを証拠とし、形容詞を生産するというよりも、形容詞性述語を形成する接尾辞であるということを述べた。

---

(19)「ガジェ」は「ガジェット(電子機器)」から形成された語基である。

## 【引用文献】

- 岩崎真理子(2009) 「形容詞性接尾辞「-ぼい」の展開」『岡大国文論稿』
- 小原真子(2010) 「接尾辞「-ぼい」について」『島根大学法文学部紀要 言語文化編』
- 小野尚之(2015) 「構文的重複語形成－「女の子の子した女」をめぐって－」『語彙意味論の新たな可能性を探って』(pp.463-489) 由本陽子・小野尚之編 開拓社
- 北原保雄(2010) 『日本語の形容詞』 大修館書店
- 近藤研至(2014) 「『形容詞語基用法』について」『日本語史の新視点と現代日本語』(小林賢次ほか編) pp.473-487勉誠出版
- 田村泰男(2005) 「現代日本語の複合形容詞・派生形容詞・疊語形容詞について」『広島大学留学生センター紀要』16号 pp.13-20
- 西尾寅弥(1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所) 秀英出版
- 飛田良文・浅田秀子(1991) 『現代形容詞用法辞典』 東京堂書店
- 宮島達夫(1980) 「語構成」『国語学大辞典』 大修館書店

## 付記

小論は、2016年度文教大学教育学部国語専修の、安永昌洸氏の卒業論文『文末表現「ぼい」「くさい」に関する一考察』の指導過程において着想したものである。

(本学教授)